

資料紹介

特定歴史公文書『昭和三十八年 海中自然動物園，熱帯植物園 (ボゴールランド) 建築構想』

Notes on the specified historical public records and archives entitled 'Development Concept for the Underwater Zoo and Tropical Botanical Garden (Bogor Land) 1963'

井上 有希

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田3060 三重県総合博物館 内 三重県環境生活部文化振興課歴史公文書班

キーワード: 三重県, 伊勢志摩, 観光振興, 1960年代

(2020年10月28日 受付)

Yuki INOUE*

Culture Promotion Division, Department of Environmental and Social Affairs, Mie Prefectural Government

Isshinden-kozubeta 3060, Tsu, Mie 514-0061, Japan

*corresponding author: xinoey0@pref.mie.lg.jp

Key words: Mie Prefecture, Ise-Shima, promotion of sightseeing, 1960s

はじめに

三重県が保存している特定歴史公文書等に、『海中自然動物園，熱帯植物園（ボゴールランド）建築構想』（識別番号Y16-19議-29）という標題の付いた簿冊があ

る（図1）。

簿冊と言っても，板目表紙に折り畳んだB4判の青焼きが11枚綴られているばかりの控えめな綴りで，建築計画の趣旨や概要、視察先でのスケジュールと交渉

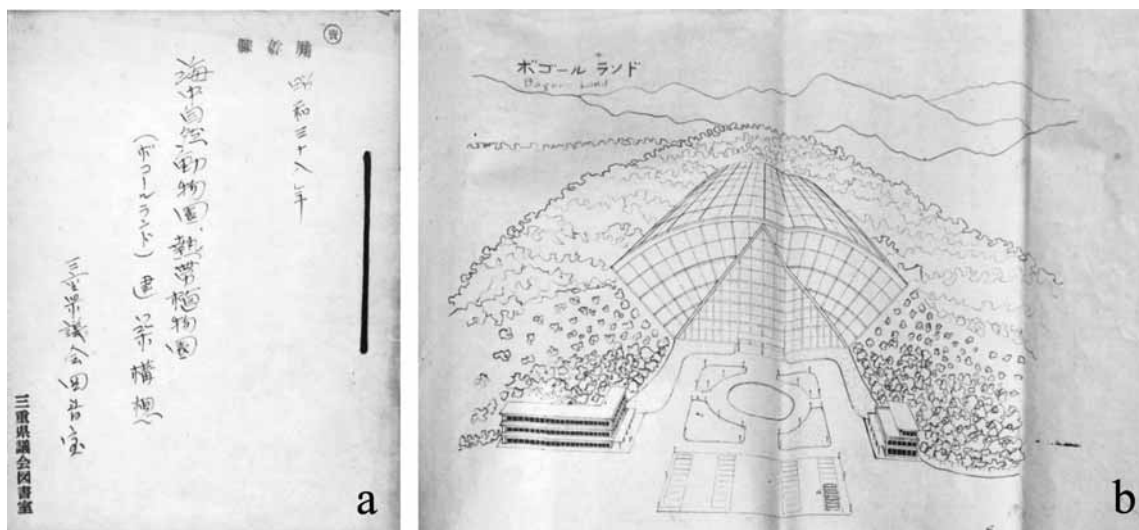


図1. 特定歴史公文書『昭和三十八年 海中自然動物園，熱帯植物園（ボゴールランド）建築構想』
a, 表紙；b, 「ボゴールランド」イメージ図。

内容が記されている。

表紙には「昭和三十八年」（1963年）と書かれており、原課は議会事務局、その議会事務局で保存年限が切れたのち、歴史資料として重要な公文書等として評価選別され、三重県公文書等管理条例（令和元年三重県条例第25号）および三重県総合博物館条例（平成25年三重県条例第64号）の定めに従い、現在、特定歴史公文書等として三重県総合博物館において保存・公開している。

筆者は特定歴史公文書等の保存・公開整備を担当しており、評価選別により保存対象となった簿冊1冊ずつに保存処置を行う中で、この簿冊を手にする機会を得た。しかし、現下、三重県において「海中自然動物園・熱帯植物園」なるものは存在しない。過去にもそのような県立施設が造られたことはない。そのため、疑問に思い、「海中自然動物園・熱帯植物園」の「建築構想」とはいったいどのような計画で、何故実現しなかったのか、僅かに残されたこの1冊の簿冊から、計画の行方を追ってみることとした。

動植物園建築の構想

表紙を開くと、最初の文書には「37.9.」と書かれている。昭和37（1962）年には構想が持ち上がっていたということであろう。それによると、「リアス式海岸地形と温暖な気候をもつ伊勢志摩海岸部の適所に、斬新な構想による海中自然動物園と、熱帯植物園を設け、伊勢神宮参拝客を更に奥志摩方面に誘導するに足る観光の一大拠点にしようとするものである。」と、当初から建設計画は観光振興が第一義で、社会教育や種の保存、生態等の調査研究を目的とするような動植物園とは設置意義が異なっていたことがうかがえる。

「海中自然動物園」は、「檻の中に入った動物をみるのと同じような水槽の魚族等をみるのではなく、自然に近い状態で、魚介類、植物等が繰り広げる様々な自然の生態を目のあたりに探索できる海中自然動物園を建設したい。」として、「海底トンネル方式あるいは「ケーソン方式」を考え、場所は、海水の透明度、流入河川、湾内地形、波浪津波地質等の諸条件と拠点としてふさわしい位置を考慮の上決めたい」とある。適所の海岸に、海の中に海中を観察できるようなトンネル施設を造るというイメージであろうか。

もう一方の「熱帯植物園」は、伊勢志摩の海岸部に

は亜熱帯植物が見られ、本州最南端に近く温暖であるという特色を強調するための植物園で、「わが国に現存する従来の温室のような構造や考え方ではなく谷筋が南面して開き、北側が閉塞された平面U字型の地形の谷を選び、尾根から尾根あるいは山腹から山腹へアーチ式ガラス張りの屋根をかけて、谷全体を温室とし、[中略]大温室の中にジャングルを再現するほか、珍花、奇花の群落、湿地帯等を造り、鳥類、小動物等を入れて雰囲気を出し、あるいは休憩、食事施設、プロムナードコースを巧みに配置するなど観光客を誘引するに足る魅力のある斬新な施設」で、「インドネシアのジャカルタ郊外にあるボゴール熱帯植物園（規模は世界一）と提携」するという。インドネシアのボゴール植物園は、オランダ統治下時代の総督府の庭園が前身の、1817年に開園したアジア最大規模の植物園である。

計画の時代的背景

非常に景気のよい計画内容であるが、時はまさに高度経済成長期の真っただ中、とりわけこの簿冊が作成された頃は、いわゆる「オリンピック景気」の波もあって、日本全体が上り調子の時代であった。国民の所得水準向上に比例して観光需要は高まり、観光開発は全国的に進められていた。三重県内でも、1960年代は民間資本のリゾート開発やレジャー施設の開業が著しい（三重県、2019）。県庁においては、1962年公表の『三重県長期経済計画』（三重県、1962）に、観光分野の将来施策の基本的方向として「観光地域の拡大と地域内周遊ルートの設定」「観光施設の整備推進」「観光客の積極的誘致策の推進」を挙げ、1949年に都市計画課観光係として設置して以降、短期間での所管替えが続いた観光担当を、1963年には商工労働部に観光課として再編している（表1）。

では、当時の三重県の観光情勢はどのようなであったか。三重県（1965c）によると、伊勢志摩地域の観光利用者は、1956年で421万1千人、それから毎年増加を続け、1962年には500万人を超えている。

このことについて、簿冊には「伊勢・志摩方面の観光客の動きをみると年間510万の流れの中で、二見までが85%、鳥羽までが53%、志摩方面に入るのは15%に過ぎない。これはもちろん観光ルートの形成、宿泊施設等の一連の観光基盤の整備状況等にも問題はあるが、楽しく時間を過させるような強力な吸引力のある

施設のないことも一つである」との分析がある。この点、県南地域への誘客の難しさは、県が抱え続けている課題であると言える。

インドネシアへの協力依頼と交渉

その状況を打破するため、当時の田中覚三重県知事がインドネシア訪問の際、当時のスカルノ大統領にボゴール分園の設置協力を依頼したのが、この動植物園計画始動の端緒であったという。

県の一行は、1963年8月14日（水）から22日（木）までの日程でインドネシアを訪れている。インドネシア独立記念式典への参加も含めた行程であったものの、植物園視察や大統領との会見を行い、インドネシアの国家資源調査省国立植物研究所評議会会長やボゴール植物研究所長と日本分園建設について打ち合わせたり、両人の案内でボゴール植物園の分園の一つチボダス植物園を視察したりもしている。

そして、このインドネシア訪問で大統領から日本分園に関して「とりつけた了解事項の要点」は次のようなものであったという。

1.目的

- 1-1. 温暖な気候と特徴のある地形をもつ三重県熊野灘沿岸にボゴールランドを建設し観光の拠点とする。
- 1-2. 県民および国民、特に青少年の理科社会情操等教化の場とする。
- 1-3. 日本、インドネシア両国友好の場とする。

2.協力内容

- 2-1. ボゴール植物園の植物を三重県に寄贈することについて原則的に同意する。
- 2-2. 三重県に建設するボゴールランドをボゴール植物園の分園とすることに同意する。
- 2-3. ボゴール植物園日本分園建設に関するインドネシア側の責任者をボゴール植物研究

所長スジアナ、カッサン氏とする。

併せて、「インドネシア側責任者スジアナ、カッサン氏と、国家資源調査省国立植物研究所評議会会長ストモ氏と打合わせて得た結果は次のとおりである。」として、

1. ボゴール植物園及びこの分園の一つであるチボダス植物園における気温、地温、雨量等の既存調査資料について、植物専門家の検討を得た上で寄贈植物を選定する。
2. 改めて日本側から専門家を派遣し、具体的な問題について打合わせる。
3. 三重県に建設するボゴールランドを特徴のあるものとするため、植物は椰子類、花木類、果樹類等を重点とする。
4. 寄贈を受ける植物は、種子、種苗だけでなく、成木を運搬することを検討する。この場合成木の運搬に関する技術的な面の研究を必要とする。
5. インドネシア国が資源保護のため輸出を禁止している植物についても特別の便宜をはかる。
6. 今後の連絡はインドネシア駐在日本大使館を通じて行う。

さらに後日、インドネシア駐在日本大使館から連絡があった内容として、

8月29日に、インドネシア国、国家資源調査庁の前記スジアナ、カッサン氏とストモ氏が、日本大使館を訪問し、次の申し入れがあった。これは、国家資源調査庁の正式申し入れと解釈して差支えない。

1. ボゴールランドの建設に関し、先づ技術的な打合わせを先行させたい。
そのために、三重県と資源調査庁との間で preliminary agreement（予備協約）を結びたい。
2. 技術的な打合わせを終了した後において正式

表1 三重県における観光部門の変遷

設置年月	部署名	関連事項
1949年4月	都市計画課	観光係
1951年6月	知事公室	観光課
1952年2月	経済部	観光課
1959年5月	商工水産部	観光事業局
1960年8月	総合開発本部	観光開発課
1963年7月	商工労働部	観光課
		三重県観光連盟設立
		三重県観光開発会社設立
		総合開発本部解体

『三重県史』（中山、1964）、および三重県行政資料を基に作成

協定又は取極を行いたい。

3. 技術的な打合わせを行うため、予備協約を結ぶにあたり、インドネシア側の担当者はストモ氏とカッサン氏両氏とするが、日本側の技術面の担当者の氏名、訪伊する調査団派遣人員、時期について確報を得たい。なお時期についてはストモ氏の都合により、9月下旬以降が望ましい。
4. 技術的な打合わせについて、必要ならば伊側から日本へ行くことも考えられる。（但し経費は日本で負担してほしい）
5. 上記予備協約や正式協定の締結に関し、日本政府とイ政府を当事者としていた旨話があったが、県政府（三重県）は独立した権能を持っているから県政府とイ政府でよいのではないか。必要ある場合には、日本大使が県政府から委任を受けて大使名で予備協約を結ぶ方法も考えられるが原則的には県政府とイ政府の間の協約になると思うと述べておいた。

と記されている。

しかしこの後、事業がどこまで進展したのか、それをうかがい知るための文書は、残念ながら現在のところ確認されていない。

計画の現実性

そもそもこの構想は、簿冊には予算措置について「県が主体となり民間資本の協力を得たい」とあるのみで、予算規模や運営に関する情報を欠いている。

ところが、『三重県地域別総合開発構想』（三重県、1965b）に、僅かな痕跡を見ることができた。「ボゴール植物園日本分園建設事業」の事業名が冠され、観光開発計画のひとつに数えられていたのである。

開発の基本方針のうち、「新しい観光資源の開発と諸施設の建設によつて観光地の魅力を強化する」と打ち出した中に「奥志摩にボゴール植物園日本分園をつくる」とあり、事業一覧には以下のように掲出されている（該当部分のみ抜粋）。

事業名	事業主体	施工予定地	全体計画 (39 (1964) 年度以降)	
			事業量	事業費
ボゴール植物園日本分園事業	県	浜島町	大温室、露地栽培、自然林、博物館、その他 約10ha (100haの誤りか)	1,500,000 千円
	民間	〃		



図2. ボゴール植物園構想図〔出典：『三重県地域別総合開発構想』（三重県 1965b）〕。

そして、「近くインドネシア政府と協定を結んだうえ、民間資本も導入し、総事業費約15億円をかけて、総面積100haという、わが国最大の規模を持つ熱帯植物園を建設する予定である。」と別記し、構想図を添えている（図2）。

また、同年、知事は『県民グラフ』25号紙上の「県政座談会」において観光開発について触れ、「伊勢志摩は国際的な観光地帯として大きく開発する予定ですし、ボゴール植物園の分園についても国際的構想をめぐらせています」と発言している（三重県、1965a）。

建築構想の結末

では、計画はなぜ立ち消えになったのか。

それは、1965年9月30日にインドネシアで起こったクーデターにより、スカルノ政権が終焉を迎えたからである。「ボゴール植物園日本分園建設事業」が盛り込まれた『三重県地域別総合開発構想』の発行から半年後のことであった。

先述のとおり、経過を示す文書は見つかっていないものの、計画当時に県の観光課長を務めていた上杉順次郎が、後年、「結果的には「イ」国の政変で駄目になってしまっただけに残念に思います」と回顧している（上杉、1972）。それによると、植物園は現在の合歓の郷（志摩市浜島町）へ誘致する計画であったという。氏もインドネシアへは植物園調査に赴いていたようで、「当時インドネシアは終戦直後の日本そのまゝの物資不足でして、熱帯植物を輸入する為、掘り起す道具まで日本から持参せねばならず、またそのシャベルや鍬を引替に貴重な植物を只でもらう交渉が成立」してい

たとも述懐していることから、計画は担当レベルで進行していたのであろう。

因みに、当時、浜島町の大崎半島には既に町による観光開発の企画があり、熱帯植物園や鳥類の狩猟場が計画されており、県は、町当局の開発計画に便乗する形で植物園を計画し、更に日本楽器製造（株）がマリナー建設のための土地取得を開始したため、三者調整の結果、日本楽器の開発計画に町と県の計画が組み入れられ、海岸リゾートの建設計画に発展した（淡野、1986）。それが現在の合歓の郷である。

かくして、「海中自然動物園、熱帯植物園（ボゴールランド）建築構想」は実現せず、簿冊だけが残ることとなった。『第2次三重県長期経済計画』（三重県、1967）にも、「ボゴール植物園日本分園建設事業」は存在しない。

昭和30年代、高度経済成長により社会や暮らしは激変し、旅行やレジャーは富裕層だけのものではなく多くの人びとにとって身近なものになった。国の施策としても、外国人観光客の来訪を促し、併せて観光開発によって地域格差是正をはかるため、観光基本法（昭和38年法律第107号、観光立国推進基本法（平成18年法律第117号）による全部改正で失効）が制定され、観光振興を推進している。

一方で、この頃の三重県の財政状況は芳しくなかった。戦後、累積赤字が膨張していた県財政は、第一期田中県政下において再建が図られ、1960年度には黒字宣言が出されたものの、再び実質収支は赤字に転落し（三重県、2019）、まさにこの動植物園が企画されていた1963～65年は、前後合わせた10年間のうちで財政赤字の期間と重なっている。さらに建設予定とされた地域に目を向けると、浜島町は元々農業に不向きな土地条件で、当時は漁業も不振であった。戦後の町税収納成績が60～70%台と低迷していたところ、1953年の13号台風と1959年の伊勢湾台風で被災、さらに赤字は累積し、1963年には自主財政再建計画を立てている（浜島町史編さん委員会、1989）。

このことに鑑みれば、高度経済成長の波に乗ったかのような華々しさを感じる動植物園構想の根底には、

観光開発により毎年増加を続けている観光客から観光収入を得たい切実な事情があったといえよう。この簿冊は、実現を見ることこそなかったものの、県の観光対策黎明期の先駆的な事業の記録なのである。

謝辞

本稿の三重県総合博物館研究紀要への投稿にあたり、編集委員の太田光俊氏より貴重なご教示ならびに参考資料のご提供を賜ったほか、委員の方々には大変お世話になりました。また、成稿に際しては、三重県環境生活部文化振興課の藤谷彰氏よりご助言を、図版作成には三重県総合博物館の堀江真季子氏のご協力を戴きました。特筆して感謝申し上げます。

引用文献

- 浜島町史編さん委員会（編）．1989．浜島町史．1292 pp．浜島町教育委員会，浜島．
- 三重県．1962．観光．*In*：三重県（編）三重県長期経済計画．pp.74-79．三重県，津．
- 三重県．1965a．知事と語る―県政座談会―．県民グラフ，25：8-11．
- 三重県．1965b．観光開発計画．*In*：三重県（編）三重県地域別総合開発構想．pp.93-97．三重県，津．
- 三重県．1965c．観光地利用状況調．18pp．三重県，津．
- 三重県．1967．観光開発計画．*In*：三重県（編）第2次三重県長期経済計画．pp.106-111．三重県，津．
- 三重県（編）．2019．三重県史 通史編 近現代2（下）．853pp．三重県，津．
- 中山春男．1964．現代編．*In*：三重県（編）三重県史．pp.471-631．三重県，津．
- 淡野明彦．1986．沿岸域におけるリゾート型観光地域の形成―三重県志摩郡浜島町迫子地区の事例―．人文地理，38（1）：7-25．
- 上杉順次郎．1972．思い出で＝ボゴール植物園のことなど＝．*In*：三重県観光連盟（編）三重の観光20年．pp.46-48．三重県観光連盟，津．